
私小説 「バツ3」

前田 隆壱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私小説 「バツ3」

【Nコード】

N2697C

【作者名】

前田 隆吉

【あらすじ】

まったくの私小説です。40歳、そこそこで3回目もの離婚に至った経緯をいまの心情とともに綴っています。

第1話

朝

ちらりと、愛読書、林芙美子の『放浪記』に目を通す。

そして、ようやく書きはじめて1カ月を過ぎたこのブログの日記も読み返した。全部で36編目、2007年4月22日がその創めだ。

じつは、1年前の4月13日に開設していた。

40歳になる誕生日の前日だ。それからほぼ、1年なにも手をつけていなかった。ボクがこの日記でよぶヤマ（富士山）の麓、朝霧高原に住んでいたときで、まだ、離婚をしていない。

毎日、忙しく何かに明け暮れていた。馬の世話や、犬の散歩からはじまり、掃除、洗濯、料理、手が空けば、林の伐採、庭の手入れ、牧柵の補修、小屋作り、薪割り、米や野菜作り……。

収入は前妻に頼っていた。一般家庭からみると立場は逆。旧姓を捨て婿に入り、ボクは主夫をしていた。やもすれば、髪結いの亭主。理解されなければボクのことを『ヒモ』だと口悪く言う人もいた。しかし、この経験で、ボクは主婦と呼ばれる女性の立場を少なからず理解できた。自分なりにだ。

それ以前のボクが何をしていたかは、このブログのプロフィールにあるので詳しくは割愛する。いま、書こうとしている話とは別のテーマだ。ひとまず、この話が完結すれば書こうと思っている。

たとえば。

過去に自分が精神障害を持った子供であったこと。不倫と婚外恋愛。神戸での震災。サラリーマンの日々、孫正義氏が立ち上げたYahoo!BBプロジェクトに携わった話。3度の離婚。アメリカのネイティブインディアンの村を訪ねた旅、アフリカを80CCのバイクで旅をした話。そして、ヤマでの田舎暮らし……。

オヤジの自慢話にはしたくない。過去を気取るほど愚かなことはない。そこから得たモノを自分だけでは持ち切れなくなった。だから、ボクは書き始めた。謙虚に書く。それを手に取った人が、目を通し、感じてくれるものがあれば、それで勇気が、生きる力が湧くようなことがあれば本望だ。夢や希望に繋がれば、この上ない喜びに変わる。

それは、自己顕示欲の表れで、読むに堪えない。そう思う人は、ここから先は読まなくても良い。きっと、すべてに満たされた生活を送っているからだと思う。いつになく、強くこう書くのは、激白しようと思いを決したからで、不快に思われた方には、心から、お詫び申し上げます。

- 今回のテーマは離婚。その心情を綴っていききたい。

放浪癖のある自分が、ひと所に居て安心できたのは、ヤマでの生活が楽しくそれどころでは無かったし、前妻を訪ねて来る客の接待がボクを旅先に居るような気分にならせたからだ。ヤマには、ボクを飽きさせない個性をもった人たちが訪れて来た。毎日のようにだ。加えて、相手に対する愛情も限りなくあった。

ボクの言う放浪癖とは、心の旅のことを指す。日々、入れ替わる新

たな感激がなければ満たされない。子供だ。だから、ヤマでの生活が性に合った。すべては順調な生活がこのまま続くと思っていた。

そこから離婚に至った経緯を書くのは、あまりにもプライベートで相手もある話。なので、伏せる。

しかし、自分だけを捉えた話だけならば書ける。前妻との生活に飽きてヤマを下りた、いい加減な男の話だ。ふたりの間に子供がいなかったことだけが、幸いだった。

以下は、現在に至るまでの話。

ボクはそうした暮らしのなかで、日々の忙しさに追いかけてまわされ、自分のためだけの時間がなかった。まったく、なかった。すべての時間を相手のためだけに捧げた。残念なことに、それを自分の心の豊かさに繋げることができなかった。

愛情を受けるために妥協していたのかも知れない。

愛とは相手につくしてから、享受するものだと思っていた。自分の本当にやりたいことを我慢して、すべてに於いて相手の生活を優先した。ボクの放浪癖はたちまちのうちに消え失せ、心の旅ができなくなった。ヤマに居て、野を歩いても感動しない。

朝霧高原のまるでアフリカ大陸のサバンナのような景色に、夕陽が射し、すべてを朱色に染め上げても、なにも感じない。空も雲も、ヤマも木も、草も、家までがその色に染まっているのだ。

ある日、80CCのバイクにテントとシュラフ、それにガソリンストロープなどの野宿の道具を積み込み、少しの着替えを背中へと背負

うバックバックに詰め込んだ。

翌日。

誰にどう思われても構わない。ボクはそこから無一文で逃げた。

第2話

その頃の自分は錯乱していた。

生来、ボクは人に対し、激しく怒鳴り散らす人間ではない。野山が好きで、人に対してもゆとりを持って接することができる。のんびり屋で、明るく笑うのが好きだ。それが、尽くダメになった。自分が鬱ではないかと、思うこともあった。

思考は短絡しつぱなした。どんな場所に身をゆだねても思索にまみれられる心の在り方ではなかった。言葉が通じない夫婦の在り方を自分勝手に悩んだ。己の行く末に不安をもった。そして、色んなことがないまぜになり、自暴自棄になった。

しかし、すべて自分で蒔いた種だ。婿に入り、結婚をし、妻の仕事を陰でサポートする。ボクが選んだことだった。そして、それに耐えきれなくなった。

本能的に自分を守ろうとした行動が、「逃げる」だった。弱い人間だから、心を開放させるには、その行動にでるしかなかった。飛び出したものの行き先なんて決まっていらない。

しかし、バイクに跨ると気分が一時的にせよ、心が少し晴れた。後退ではなく、前進。どじゃぶりの雨にも関わらずだ。

- あれ、隆吉やないの？ 何してんの？

信号待ちをしていると、後ろからきた軽四に突然声を掛けられた。近くに住むクマさんだ。年は八ツか九ツうえ。奥さんの愛称はうさ

ぎさん。ヤマに貨車を置き、20年も住んでいる。ボクは、ヘルメットのバイザーを上げ、答えた。

- ちょっと、旅行に行こうとおもて。

- この大雨のなかかいな。家に寄っていかへん。お茶でもどーやア。

彼らは、ボクのそうした行動が何を表しているのかをすぐに察した。心の置ける夫婦で、勘もいい。それに、ボクが悩んでいたことも知っていた。

- はい。

ボクは素直にそれに応じた。

- そういう、ことかいな。わかった。明日から、その旅行での小遣いを一緒に稼ごう。

静岡と山梨の県境にある旧上九一色村には芸術家と呼ばれる人々が都会から移り住んでいる。ヤマ裾に牧草地帯が延々と広がり、樹海の織りなす色とりどりの四季に心を奪われた人たちだ。冬の白、春の緑、夏の蒼、秋の赤。クマさんもそのひとりだった。うさぎさんもそうだ。

話を聞くなりクマさんは、「自分には銭別をやれる金はないが」と前置きをしてから、その芸術家仲間である写真家が、ロケで使う現場の草を刈るアルバイトを探している、と。ボクに紹介した。

二人でほぼ二日、報酬は合わせて3万円。このあたりではそんなも

んだ。クマさんは、それをすべてボクにくれた。

翌日。

良く晴れた初夏。梅雨もこれで明けそうだな、と。思った。ヤマからボクの頭上へと角度を上げていく陽の光が燦々と、眩しい。

庭先に置いたバイクに降ろした荷物をすべて積み直し、ボクは大洗へと向うため、再びバイクに跨った。苫小牧行きフェリーに乗船するためだ。

目的地は、北海道の西海岸、小樽市に隣接する赤井川村。アリスフアーム。思い付きではなく、そこで暮らす夫婦にどうしても逢いたくなった。自分が目指そうとしていたことに一番近いことをしている二人で、そこにいけば、夢があるような気がした。

元は旅人の二人。確かインドで出会っている。日本に戻り、岐阜県、飛騨地方の「有巢」という集落が出发点。木工、織物、自給自足するコミュニティを作り、そこからさらに北海道へと移住した。それまでに色んな経緯があり、また、赤井川村での生活にしても、ここでは紹介しきれないほどのドラマがある。

面識はないが、行けば逢えるだろう。逢えば、もういちど、自分が朝霧で一からやり直す気持ち湧き起こるかもしれない。そんな思いがあった。

しかし、それとは別なところでは、自分のやりたいことを目指せ！と訴える心もあった。交錯していた。

煩わしく、邪魔くさい。

すべてを道祖神という勝手にボクが作り上げたカミサマに預けた。心が無に近くなった。徐々に自分らしさが戻ってくる。そう、この感じ。原点回帰。ボクだけの都合の良いカミサマに感謝した。

そして、道志村を抜け、東京に入る頃には三年ぶりの旅人へと戻っていた。

第3話

じつは、大洗へと向かうのは、その日でなくても良かった。

ボクは彼らに「きょう出発しないと間に合わない」と、嘘をついて出た。一刻もはやくヤマから逃れたい。そうした思いがボクに嘘をつかせ、旅出させていた。

夜。

出発港の大洗に到着する。ボクを待ち受けていたのは、真っ黒の海と空。月明かりも、星の瞬きもない。寝る場所を求め野良犬のように彷徨した。ようやく見つけたのは、漁港にあった小さな公園。悪戯書きがされた、あずまやとトイレ、水が出る筈の蛇口には取っ手がない、みじめな公園だった。

空腹を満たすために手に入れた晩飯は、賞味期限が切れて捨てられたオニギリと、おなじく菓子パンとピーナツバター。公園近くのコンビニで捨てられていたゴミを漁った。北海道へと向かうフェリー代を支払った後のことを考えると、少しの金も遣えなかった。

それでも、心は十分に満たされた。貧しくはない。これから先のことを考えると体が芯から奮えた。それだけで十分だった。漠然としていても、これから先に向かう旅先での期待と夢はボクを突き動かす原動力になっていた。

空腹を満たし、シュラフ（寝袋）に潜り込んだ。テントはなし。あずまやでも良かったが、空を見たかった。暗雲立ち込めた真っ黒の空をだ。ホワイトマーカーを手に持ち、そこへ想いをぶちまけ絵を

描いた。黒い隙間がなくなるほど描き続けた。羊を数えて眠りにつく心境ではなかった。

手を休めると、波の音がザーザーと聞こえた。やっとだ。海までは100mもない。高ぶった心はその音を耳に届けていなかった。時計を見ると深夜の2時。波音にまじり、遠くでマフラーを改造したバイクが荒れ狂いながら走る音が聞こえる。

<若いよな……。

ボクは自分のことを棚にあげ、ゆっくりと目を閉じ、眠りについた。

第4話

2等船室には同じくバイクで旅をする人や、帰省する人、仕事でそこへと向かう人たちで混み合っていた。

ボクは荷物を置き、デッキへと向かうと、ゆつくりと離れていく黄色い明りに照らされた大洗港を見ていた。湾を出ると、舟足が速まった。真下に目をやると見え隠れする喫水線と、後方へと泡立ちながら流れていく白波が目映る。

トラウマのように自分の心に残る母親のあの姿がなければ、もう少し、ましな人生を送っていたかも知れない。不意に胸を突き刺すような苦い思い出が現れた。ボクはすべての過去をこの波に流し、消し去って欲しいと願った。そうした思考が、旅人へと戻った筈のボクを、また、過去へと引き戻すからだ。安定しない思考。また、気分が萎えてくる。

子供の頃、とにかく、家が貧しかった時期がある。小学3年生の頃だ。家業である床屋が潰れ、ボクたち4人の家族は路頭に迷っていた。残された家のローンと開店のために用立てた資金、中学を卒業しただけの両親は体をつかう仕事以外、そのために借りた金を払う手段はなかった。

父親は朝、昼、夜の3交代勤務の仕事に就いた。母親は夜の街で働く口を見つけた。しかし、どんなに両親が必死になっても、稼いだ金は3日で消えた。

そして、その生活になって半年が過ぎると、あきらかに母親の化粧が変わった。服装も艶めかしくなった。

歓楽街に舞う夜の蝶。ボクにはそれが醜い蛾に見えていた。

明け方の白々とした空。タクシーのドアが、バタンと閉まる音が聞こえると酔ってフラフラになった母親がカギを開けて家に入る。ボクは眠い目を擦りながらいつも起こされた。

- 隆吉、きょうも、おかあはんは、稼いできたでエ。

酒臭い息を吐きながら枕元へと座り、身に付けた赤いブラジャーから、クシャクシャに丸められた千円札が何枚も出てくる。透けたパントリーからは、一万円札のときもあった。30年も昔の話だ。ボクの仕事はその丸まった金を一枚一枚広げて数えることだった。

果てもなく、それが嫌だった。

まだある。

あるとき、母親が夜の店で知り合ったという男が家に転がり込んできた。そのときから、5人家族になった。同じ屋根の下に、両親とその男、そしてボクと弟。ありえない。

- このヒトが、ウチで間借りしてくれたら、家にお金入れてくれはる。

夜。

襖越しに聞こえた喘ぎ声が、母親のそれを嘘だと知らしめた。何をしているのか子供のボクにでもわかった。叩き潰してしまいたいほど、醜い蛾。金と言う灯りに群れる蛾。母親は勤めをやめたが貧乏

でも飯が食えない方が、マシな生活に思えてならなかった。

ある日。

その男が家を出ると言いだした。ありきたりな痴情の纏れ。そんな不条理な生活がいつまでも続く筈がない。学校から戻ると、母親はちよつと男とそんな話をしている最中だった。

- 嫌や、出ていかんといて。お願いや、なア、お願いや……。

居間で宿題をする振りをしながら、耳をすませボクは二人の会話を聞いていた。縋りつき、泣きじゃくる母親の声がいつまでも続いていた。父親は仕事に出ていない。ボクは4人の家族を守りたかった。誰ひとりとして欠かしたくは、なかった。

男がこのまま母親を連れ去るかも知れない。そう思うと、怒りが込み上げ、血が沸騰を極めた。ボクは手に握りしめていたHBの鉛筆を台所で果物ナイフに持ち替えた。

そこからの記憶は、グシャグシャになってボクの中にある。

描写できるほど鮮明に残っていないし、あれは夢だったのかも、と思う時すらある。しかし、返り血を浴びたボクの服は翌日のゴミの日に出され、男は家から消えた。夢では、ない。

長年持ち続けたこの記憶はボクのなかでいつまでも消化できず、いつしか、女性に対するトラウマへと変貌した。

幸せな家庭を持ちたいと思いつつも、その陰にある征服欲と赦しのない、愛。

一緒に暮らす女性に非を見つけると、それまでに確かに心のなかにあった筈の愛が、簡単に消えた。それを得るために自らのすべて捧げているという思いが、屈折した自尊心を持たせていた。少しの非で、その自尊心は簡単にへし折れた。それが、ボクの愛だった。

と。

流し切れない過去を胸に止め、ボクは泡立つ白波を延々と目にしながら思索を巡らせ始めていた。

第5話

ボクのなかで、何かが変わる必要があった。

このままでは、なにも進まない、と。思った。

デッキから明かりの消えた客室に戻ると、そこからバックパックを持ち出し、何かを書きたい、と。思った。

そうなることを予想するようにバックパックへと詰め込んでいたB5サイズのパソコンには、次々と文字が打たれていく。脈絡もなく、思いつくままに書かれる文章は、自分の生い立ちから始まるものだった。

深夜、ディーゼル機関の音だけが、耳に聞こえ、人気はまったくない。フェリーボートのラウンジに、そうして居るのはボクだけで、そこにカチャカチャというキーボードを叩く音が追加された。

眠りについたのは、中学生の団体が眼を覚まし起きてきてから。その年頃に特有のオーラが、ボクには辛く感じた。パソコンを閉じ、客室へと戻り、頭から毛布をかぶり、寝る。フェリーが苫小牧に着岸するまで、あと、10時間以上もあった。

その間は、ずっと、まどろんでいた。熟睡はしていない。人の声が耳につき、空腹に耐えられず、船内のアナウンスに腹を立てた。やつあたりだ。食うものなど持っていないく、フェリーのレストランで食事をする金もない。便所でタラフク水を飲んだ。

再び、横になり、眼を閉じた。

着岸を知らせるアナウンスが船内に響き、フェリーから下船しても、夕闇に包まれた苫小牧港でボクは動けずにいた。目的の小樽までは300キロ近くもある。バイクで日本中を旅して周っていた頃の友人を訪ねる気にもなれない。

港の近くに公園を見つけ、また野宿。

しかし深夜、雨にやられ眼を覚ました。濡らしたシュラフ（寝袋）を抱え、渋々、その場所へとテントを張った。

心の持ち方が行ったり来たりとするのは何故だろうか？

ヤマから飛び出し、バイクで大洗へと向かう途中で切り替えられたと思っていた。

フェリーへと乗船するなり、過去にこだわり続ける自分が現れ出した。

しかし、それが「書く」という行動に出た時、沈着する。

そのことが不思議に思えてならない。

と。

横になるが、また、自らへの問いかけと、生じた疑問に目が冴えて眠れなかった。

朝。

靄がかかったような空。燦々と光り輝く太陽に照らされ、緑の大地がどこまでも広がる北海道のイメージとは大きく異なる空。

> ハア。

と、溜息をつきながらバイクにまたがりエンジンをかけた。常に調子がいいのは、コイツだけだ。

苦小牧へと向かう国道をひた走る。途中のディスカントストアで米5キロに醤油と塩を買った。それだけあれば、当分の空腹はしのげる。

> なんだか、修行をしてるみたいだな。

まるで他人事のように自分自身を傍観した。この2日間、水しか口にしていない。札幌を過ぎたところで公園をみつけ、2合の米を炊いた。半分は、目的地、アリスファームへと着いてからの晩飯。炊きあがったメシに塩をかけ、のどを詰まらせながらかきこんだ。

再び、走り出し、小樽から国道393号線で赤井川村へと入る。アリスファームが経営する「ホテル ドローム」へと到着したのは、夕方4時。途中の休憩を入れて8時間もバイクで移動していたことになる。

受付でキャンプ代、800円を支払う。野宿でもよかったが、この建物の中が気になった。それに、ここに居れば所用で来るかも知れないオーナー夫妻に逢えるチャンスが巡ってくる可能性もあった。

白樺の葉が風に揺られる音が優しい。

日が昇る方向を磁石で確かめ、テントをその木の傍に張った。脇に流れる川で体を洗い、そろそろと上流へと沢を歩きながら、岩と岩の間にそつと手を入れ、魚を探した。こうすると、じつとしているヤツが簡単に捕まえられる。ただし、そこに居たらの話だ。

ぬめツ、とした感覚が指先に伝わる。小ぶりだがヤマメを捕まえた。上品な釣り人ならば、放流するサイズだが、腹が減ってそんな紳士なことなど言っていられない。続けて2尾、ゲット。満足してポケットに押し込み、川岸に生えていたフキも採った。どちらも、晩飯のおかずだ。

魚は塩をかけ、焚き火で焼いた。フキは醤油だけで煮る。山椒があればと探したが目につかなかった。ゆつくりとした時間が音もなく流れていく。すべてが自分のペースになると、飯をのどに詰まらせてかきこむという、下品なこともしなくなる。

> 今晚は何も考えない夜にしよう。

そう決めて、バックパックに忍ばせておいた愛読書「放浪記」を取り出した。テントのなかでは、真鍮製のキャンドルランタンの灯りだけが揺れる。

私は北九州の或る学校で、こんな歌を習った事があった。

更けゆく秋の夜 旅の空の

侘しき思ひに 一人なやむ

戀こひひしや古里 なつかし父母

私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない。父は四国の伊予の人間で、太物の行商人であった。母は、九州の桜島の温泉の娘である。母は他国者と一緒になったと言うので、鹿児島を追放されて父と落ち着き場所を求めたところは、山口県の下関という処であった。私が生まれたのはその下関である。故郷に入れられなかった両親を持つ私は、したがって旅が古里であった。それ故、宿命的に旅人である私は、この恋しや古里の歌を、随分侘しい気持

ちで習ったものであった。

寝る前にこの一節だけを読み、ボクはランタンに息をそつと吹きかけた。こうすると、その夜は林芙美子が旅をする夢を朝まで見れる。

テント越しに差し込む月明かりに安心した。

今晚は、誰も自分を暗闇のなかに連れていけないな。

そう、ひとりごちて、ボクは静かに目を閉じた。

明日は、ここから少し離れたアリスファームを訪ねよう。

第6話

翌朝、テントから飛び出し赤井川村の中心へと向かい公衆電話を探した。アポイントメントをとるためだ。ポケットに押し込んでクシヤクシヤになったメモを広げ、そこに書かれた番号をダイヤルした。最初に電話口にてた女性へとその旨を伝えると彼女は、アリスファームを経営する藤門さんに取り次いでくれた。期待しながら声を待つ。

せっかく、ここまで来てもらって申し訳ないが、ゲストと個人的に会うことはしていないんだよ。

5分ほどの会話だった。必ず逢えると根拠のない自信に溢れていたボクは落胆した。相手にではなく、自分にだ。

何かが、違うか、

想いが足らず相手に伝わらないか、

そのどちらかだと、思った。

前者は、ボクの心のなかに置いた道祖神が、もっと違う道を用意している。すなわち、アリスファームの藤門夫妻に逢うことがこの旅の目的ではない、ということ。

後者は、ボク自身の問題で想念が足らず、必死の思いが相手に伝わっていない。例えば、ボクがラジオ局ならば、基地局が発信する電波が弱い、ということだ。聞こえとするラジオ側の問題では、ない。

それを確かめたいために、アリスファームのある場所へと向かう。この農場が主としているブルーベリーには時期が早く開園していないが、外からでも見れる。

バイクを道端に止め、木陰に座り込んだ。

バックパックから便箋を取り出し、藤門夫妻に宛てた手紙を書いた。将来の自分に向けての叱咤とも読める文章。藤門夫妻がここに来るまでに辿った道が、自分には素敵に思えてならず、目標にしたいと書いた。

ただし、まったく同じことをしたいのではない。人に何かを伝える場所を持ちたいのだ。それをするための道具が、農業であったり、モノを作ること。絵を描くのもいいし、演劇や歌うこと、とにかく、内に秘めた想いを発散できることであれば、それをボクが持つ場所でつかう。

伝える「何か」とは、その喜びであり、楽しさ。生きる力だ。

つらつらと、そうしたことを道端で便せんにも5枚も書いた。

道の反対側。離れた場所で何かを建てている場所に、アリスファームから出てきた4輪駆動のピックアップが停まった。遠眼だが降りてきたのが、藤門さんと分かった。一瞬、胸が高鳴る。

しかし、ボクの足はそこから動くことはなかった。100メートルの距離しかないのだ。それは目標が確かに定まった時にみせる自分の行動ではない。

ボクはその手紙の最後に、「いつか、必ず逢えるときがありますように」と願いを書いた。

そうした願いの裏返しは、到達地点に向かうためにボクが、今、何をしないといけないのかを見つけていないからだ。いまの自分では、藤門夫妻に会ったとしても、薄っぺらの人間だという印象を与えるだけで終わってしまう。

思考を原点に戻す。

旅の目的は、離婚をせずに元の鞆に収まり、そこで場所を作るのか、離婚を決めて一からやり直し、自分の場所をつくるのか、それを見極めること。

いずれにしても、そうと決まったときに、やるべきことは幾らでもある。

立ち上がって、空の蒼に目をやった。

そして、ボクは目の前を通りかかったアリスファームの従業員の男性に手紙を託すと、再び、バイクに跨り、エンジンを始動させた。

第7話

中溪宏一が、北海道の宗谷岬からアースデーが開催される東京の代々木公園へと歩いている話はメールを貰って知っていた。

彼は一途な想いで自分の道を突き進んでいるNice Guyだ。

宏一が誰なのかをざっと、紹介する。

1971年11月2日 米国シアトルで生まれ。鎌倉育ちで 青学の経営学部卒業。せっかくく入社した三菱商事を務めて間もなく退社。その後、アジア、欧州各地、北中南米、アフリカの一人旅を始めた。

彼の人生を大きく変えたのは、旅の最後の大陸であるアフリカだった。国連のピースキーパーであり、世界環境会議に出席したのちに開催地の南アフリカから中国へと木を植えながら歩きはじめたポール・コールマンに、ひよっこり出逢ってしまったのだ。

今までに歩いた国は、39ヶ国。歩いた距離は、4万4000キロ。20世紀に戦争で亡くなった人のために木を植えながら徒歩の旅を続ける男だ。その詳しい内容については、アースウォーカー ポール・コールマン 木を植える男という本が出版されているので割愛する。
とにかく。

ボクは、このふたりの男たちにアフリカのザンビアという国の首都ルサカで出会った。草食動物ならまだしも、ライオンがいるかも知れないジンバブエの国立公園を歩き、国境を越えてきたこのふたりに、はじめて出会った時の顔ときたら、見れたものじゃなかった。

クタクタだ。

しかし、話を聞いて、ボクはハマった。

スポンサーをつけるのに東奔西走するぐらいなら、すぐに歩いて木の1本でも植えた方が、はやい。僕の伝えたいことを一人でも増やすこと、木を植えることが目的なんだ。

ポールの言葉だ。

自分は世界中の祭りを見て歩こうと、会社を辞めました。ポールに出会って、こんなスゴイ祭りを、それもたった一人でやっている。体中がブルブルと奮えました。

宏一の言葉だ。

ボクは、予定よりもルサカでの滞在期間を延ばし行動を共にした。その間は24時間、ずっと彼らの話を聞いていたような気がする。

その1年後。

ここからは、長くなるのではしおって書く。

ボクは朝霧高原で再会を果たした。富士山の麓で開催されるイベントの主催者に、先に書いたような話をしたら、ゲストとして呼ばれることになった。縁があったのだ。

イベントを終えて、富士宮市から広島、長崎に向かう旅をはじめた二人は、途中で、菊池 木乃実という小説家に出会った。彼女はポールの半生を書きたいと自ら申し出、了解を得ると、徐々にその主

人公に傾倒し、沖縄で結婚した。いま、ポールは宏一と別れ、夫婦で旅を続けている。南米のどこかの国に居る筈だ。

そして宏一は、ポールの意思を引き継ぎながら、真似ではなく、自らのアクションをオリジナルへと変化させながら、日本を歩きはじめた。北海道の宗谷岬からアースデーが開催される東京の代々木公園への徒歩の旅は、その最初のアクションとも言える。

前置きが、長くなった。

ボクはアリスファームから離れ、公衆電話を見つけると、ポケットから手帳を取り出し、宏一の携帯電話にダイヤルした。

おおっ、隆吉さん、お久しぶり！元気してますか？

いつもの明るい声が受話器から響く。

元気、元気！コウイチは、いま、どこにいるの？

北海道の宗谷岬を出発してですね。下川という小さな町を歩いています。

ほう、じゃ、8時間後にその町営温泉で会うかな。

ボクはそんな温泉が本当にあるかどうかも知らずに、アテズツポウでテキトーに言った。

へへッ、また、冗談を。じゃ、待ってますよ。

ホイホイ、じゃ、元気だね！

第8話

残金14,856円。

2006年7月28日の日記に書いてあったこの金額はボクが下川町へと飛んでいく、前日のものだ。

そして、この当日。

562円(ガソリン代)

148円(途中、腹が減ってポプラというコンビニでカップ麺)

14,146円(あと残りの金額)

きついな、と。財布の中身を見ながらつぶやく。

名寄の市内に入り、ボクは進路を東にとり下川町へとおはなを走らせた。目的地は近い。広々とした田園風景に寒冷地でも耐える品種へと改良された稲穂がフワフワと風に揺れている。遠くに背の低い山が流離の雲を頭にのせ、ぼんやりとボクを見ている。

目に飛び込んでくる景色のすべてが、どれもゆったりとして、アクセクしていない。

冗談で言った町営の温泉は本当にあった。とは言っても、北海道には、どこの町や村に行っても当たり前のように温泉があるから、ボクのカンが鋭かった訳でも、なんでもない。おはなを止めて、あたりを見回す。

歩道に目印のようにバツクパツクが雑然と転がっている。薄汚れて汚く、見覚えがあった。

コウイチ！

ボクは温泉横に設けられた公園のあずまやで、寝転がっている男に声を掛けた。長い髪を後ろで束ね、日に焼けた細面の顔立ち。間違いない。

おおう、リュウイチさん！

約1年ぶりの再会だ。それ以上の言葉もなく、肩を組み抱き合った。

野坂さんと出会ったのは、この直後だった。肩からタオルをぶら下げ、ひょうひょうとした足取りで傍を通りかかり、声を掛けてきた。

あれ、君、歩いて木を植えてる人じゃない？

当然、ボクをしまってではなく、コウイチが前日の道内のニュースで取り上げられていたからだった。

翌朝。

話の成り行きで、この村の役場に勤める野坂さんは、ボクたちを色んな場所へと案内してくれた。過疎化の続く、この村を色んな人に知って貰いたいという思いからだった。

そして、これが切欠で、ボクは野坂さんに拾われ、彼の別宅にしばらく住ませて貰うことになった。コウイチとはここで別れる。

その日の午後、ボクは野坂さんに連れられて、森林組合へと向かった。そこなら、何かアルバイトがあるだろう、と。掛け合ってくれ、と言っただ。ボクは何から何まで、野坂さんに甘えた。

それで、おまえは、いくつだ？

40です。

普段の仕事は？

妻が稼ぎ、ボクは米を作ったり、その敷地内で家を建てたり、補修をしたり、馬も飼ってますね。しかし、その生活が上手く行かず、飛び出してきたので、いまは、無職。これから先は、彼女とは別れて小説家になりたいと思っています。

と、思わずボクは本心をさらけ出した。初対面の人に言う話ではない。

おいおい、野坂、おまえ、また変なのを拾ってきたな。

この村のボスといった風格の漂う組合長は、椅子にドツカリと腰を下ろしたまま、そう言ったあとで高笑った。

なにが気に入られたのか、組合長はその場でボクをアルバイトとして採用を決め、旅を続ける資金をこの村で稼がせてやろう、と言ってくれた。

与えられた仕事は、山に出てクマ笹の葉を集め、それを処理する工場に持ち込む仕事だ。そこで、健康食品の材料として抽出したエキスを使うらしい。

ボクの他には、お年寄りが3人。毎朝、6時に家にまで迎えに来てくれ、その日、工場から言われたキロ数になるまで、クマ笹をドンゴロスの袋に詰める。半日だけの仕事だ。

アルバイト料は、その重量で決まった。うまく、パンパンに袋に詰めれば30キロを軽く超える。一袋1500円ほどの買い取り価格だ。しかし、初日から2日間ほどは、新米のボクがいくら頑張っても、お年寄り3人に敵うことはなかった。手にした金額は4000円ほど。時給にすると300円と少し。

北海道にしては暑く、みんな異常気象だと文句を言いながら働いていた。ノルマを達成するために、午後からも働くのはこのお年寄りたちには辛い夏日だった。

3日目、さつさとコツをつかんで、助けてくれと、ひとりの爺さんがボクに技を伝授してくれた。

場所の選び方、見つけたクマ笹の葉をカットする方法、袋への詰め方、などなど。どれも、理に適ったやり方だった。それを半日かけて、傍で教えてくれた。

その日から、ボクのアルバイト料は倍以上になった。半日で4500円。

午後は、組合長に宣言した通り小説を書いた。

>そう言ったんだから、嘘ついちやいけないよ。

書かないと、そう言って誰かに咎められるように思った。以外にも、

パソコンを立ち上げるとキーボードの上で指が軽やかにステップを踏んだ。

カチャ、カチャ、カチャ。

小説を書くために普通は箇条書きにしたあらすじを先に作り、それに沿って終結させるのが本来だが、ストーリーはすべて完成していて、ボクは何も考えず、ただパソコンの前に座りスイッチを押すだけだった。

書いたあとから、読み返すと不思議で面白い。

誰が、これを書かせているのだろうか？

不思議にそう、思った。

自分を主人公にみたくて、心の成長を描いたこの時の作品。これが、スバル新人賞へとこの春に投稿した「フラッシュ」の元となった。

第9話

いまから思えば、下川での約3週間近くに及んだ生活で、ボクのかなかでは3度目の離婚は決定していた。

しかし、それをさらに決定づけさせたのはアイヌモシリ1万年祭がおこなわれた場所での事故だった。開拓のために強制移住させられた歴史をもつアイヌ民族。その迫害されたアイヌの供養のために、毎年8月15日〜20日の6日間に渡り、アイヌの人たちが住む、ニフタニ^{ニフタニ}風谷から山道を車で1時間ほど走った場所でのこの祭りは催されている。

この祭りにボクを導いたのは、下川町を出てから再び連絡をとったコウイチだった。ボクは彼の待つ、美瑛という町までおはなを走らせ、合流したのだった。

そして、翌日。

> この感じはなんだろう？

美瑛から200キロほど離れたアイヌモシリ1万年祭の会場に到着するなり、ボクは陰と陽、両極を極める何かを胸に感じた。それをうまくは説明できない。旅の途中でたまにボクが、こうして感じるのは五感以外の感覚で、動物になっている。

行くか、戻るか。食うか、食われるか。伸るか反るか。

2者選択の言葉が次々とボクの頭の中で文字になって浮かぶ。

2日目。

ボクはそのままアイヌの供養に参加し、そこでの滞在を続けていた。夜になると、会場の中央で焚き火がはじまった。それぞれが、そこで輪になり思い思いの時を過ごしていた。ボクもその中にいた。

アフリカ大陸のガーナという国から来た青年が、この祭りに参加していた。話好きで、明るく、会場に居る誰よりもボクは彼と話があった。なにより、ボクは彼と居ることでアフリカの旅を思い出し、ガーナに居るような気分浸れた。

しかし、その後。

その彼が、アフリカの民族楽器、ジャンベという太鼓を叩きはじめるとボクの体が勝手に動き始めた。西アフリカの風が突然、ボクのなかで吹き始め、鮮やかに蘇ったのはその当時に幾度も眼する機会があった民族の踊りだった。

両足を交互に踏み続けるステップ。夜空に舞いあがる火の粉を仰ぎ、この世に受けた生に感謝する。天からの知らせが脳天から突き刺さるように届いたとき、誰もがトランス状態となり、己のルーツを語るかのように体中で表現をはじめた。

それが蘇った。

そして頂点に達したとき、ボクは赤々と燃え盛る炎のなかへと倒れこんだ。暗闇の中、見る見るうちに、右手に水泡が浮かび上がった。手のひら全体を覆う大ヤケド。誰かが、氷を持って来てくれた。ジンジンと痛む。痛みに強いとはいえ、さすがに眠れない夜を過ごした。

朝。

一晩かけて整理できた思いを胸に主催者であるアシリ・レラ（山道康子）さんのもとを訪ねた。

アイヌは、ウサギを原点に戻す象徴として、歌や民話が語り継がれているわ。原点回帰。あなたが、昨晚から見ていたイメージはそれね。意味は自分で考えなさい。きょうは、女性たちだけでアイヌの供養をするわ。そこでも、ウサギの歌をうたう。聞いて行きなさい。

ボクはヨモギの葉をすり潰したものを手のひら全体へと塗りこんでもらいながら、彼女からこう聞かされた。ウサギとは、ボクがこの会場に着いた途端から胸に浮かんで消え、再び蘇るイメージだ。昨日の夜、それが大きくボクのなかで、飛び跳ね頭からついて離れなくなったのは何故だろう、と。ボクが彼女へと訊ねた答えだ。

なぜ、原点回帰と云うか？ それはね。ウサギは餌を摂るときに、自分の巣穴から出て、食べ終わると、また、同じ道をたどり巣へと戻るのよ。それが、あなたの答えじゃない。

> 原点回帰かア……。

そう言って、不思議そうにひとりごとを言うボクに彼女は、再び、この言葉をくれた。

第10話

いくら北海道でそんなスピリチュアルな体験をしても、帰ってきて離婚という現実に向かい合い、届を役所へと提出したり、家にある様々なモノを片付けるという作業は辛い。

仮にも自分が心から愛した女性だもの。そこと別れるということが過去のそうだった自分をすべて否定するということに繋がるからだ。それを3度も繰り返し返しているという自分が、なんと愚かで許し難い人間だと、思った。

しかし、

>ウソじゃなかったンだけどな、と。

いくら、そう言ってみたところで、ボクの心の中まで誰も見えない。相手の女性にもだ。

だから、

>結婚に向いていないのかな。

とも思った。

落ち過ぎると、相手を逆恨みする気持ちが現れ出した。

>結局、最後までオレのことを理解してくれなかったじゃないか！

>君のために、オレは身を粉にして働き、すべて捧げた。それに何か返してくれたか！

> 結局、自分ばかりじゃないか。この生活を清算しても、オレには何も残らない！

せっかく自分のなかで築き上げてきた経験が、今回の離婚ですべてぶち壊される。思考はそこへと向いていった。結婚して姓を変え、相手のすむ場所で暮らし、形としては婿に入った生活だったから余計だ。

現実とは、そんなもんで、いくら、気づきを得とくするような出来事に遭遇しても、エゴはなくならない。人間とはそんな自分本位に出来た生き物なんだ、と。

最後の荷物をバイクの荷台に括りつけてヤマを下りながら、そう思った。這い上がる気持ちも湧かない。しばらく落ちていようと思っ

た。

そんなボクを拾ってくれたのは、ヤマを下りた町にすむ、ニューヨーク人の男だった。財布のなかにある金は2万円。北海道でアルバイトしたのが残っているだけだ。家もなく、関西にある実家にもいまさら戻るわけにも行かない。

そんなボクを快く引き受け、その頃、まだ、リフォーム中だった築120年の民家に住まわせてくれた。電気も水道もガスも、すべて料金は彼がもってくれた。

シゴト ヲ デツダツテ クダサイ。

そう言われて1日やると時給800円で金までくれた。

最低点まで落ちると、本能が働き、そこから上昇に転じる。

思考が上を向いていったのは、それから1か月後だった。窓口を彼にして、ボクは横浜にあるオーガニックストランの店内改装工事を引き受けた。

大工仕事はそこそこだが、マネジメントはできる。

そう自信タツプリに言って、他にアメリカ人も呼び、3人でチームを組んだ。ひとまず、自分のやりたいことをするために、なんとしても金が必要だった。

9月に離婚して、2万しかなかった財布に、その仕事をやって後にも別なのが入り、銀行にドンドン金が貯まった。

そして、彼の生まれ故郷であるニュージーランに3ヶ月間、逃げた小説を書くためだ。日本に居るよりも別な場所で、それも海外で書きたいと思った。

ネタは、北海道で初めて書いた小説「フラッシュ」だ。そこに登場する主人公に自分の生い立ちを書き足していった。フィクションだが、私小説に近い。

完成させて再び日本へと戻ってきたのは、今年の2月下旬。

おう、オレ、オレ。戻ってきたで。

そう言って、実家に電話した。

お帰り。

電話口から聞こえる母親の声に覇気がない。

どうした？

おばあちゃんが、死にそうや。あんたを待ってる。はよ、帰っておいで。

ボクは、深夜バスに飛び乗った。寝ては覚めると、まどろみのなかでおばあちゃんのことばかり考えていた。

車中で白々とした朝を迎える。

神戸の三宮で大方の人が下車した。ボクの目的地は終点の姫路。久しぶりの古里に到着し、その場所に立つ。帰ってくるたびに景色が変わる駅の様子に、なんとなく寂しいものを感じた。あたりを見回しも、公衆電話を探す。

昨日の晩、死んでもたア……。

呼び出し音が4、5回鳴ってすぐ、ボクが何を言う前から、受話器から母親のかすれた声が聞こえた。間に合わなかった。

親族だけの密葬。おばあちゃんの遺言だった。遺骨を拾うときにボクは棺桶に使われていた釘をポケットに押し込んだ。

第11話

> 原点に戻る。

再び、その言葉がボクの頭をもたげた。二風谷のアシリ・レラ（山道康子）から言われた言葉だ。

ボクをそうさせたのは、葬式を終えて役所に行き様々な届を出す処理を引き受けたからだ。その処理で、三代前までの戸籍謄本が必要だった。

ボクは興味本位でそれを、

可能な限り、遡って見せてください。

と、担当する若い男の職員にお願いした。アウトプツされた紙の厚さは3センチを超えた。それを「たつの市」と書かれた茶封筒に入れて、実家に持ち帰った。

> アレ？

椅子に腰掛け、その戸籍謄本を見ながら思った。3代前。ボクのおばあちゃんの母親。つまりは、曾おばあちゃんは14人の子供を私生児として生んでいた。そのうちのひとりは、誰かに引き取られたというから、13人を育てている。

1度、2度、大阪の平野区長吉長原にあった家に遊びに行った記憶がある。当時、チンチン電車の駅のすぐ傍にあった木造の長屋に住んでいた。コメさんという気丈なおばあちゃん、亡くなった時の

葬式には吉本の漫才師だった横山やすしが参列していた。駆け出しで金がなかった彼を居候させていたからだ。その縁があつてなのか、何番目かの子供は、夫婦漫才師に育てている。

そのコメさんの長女で、芸人の厳しさを知るボクのおばあちゃんに、そんなに、勉強せえへんかったら、あんたも、吉本入れるでエ。

と、よく叱られたものだ。

話がだいぶ、それた。

不思議に思つたのは、私生児だったということをし、いままで誰にも聞かされていなかったからだ。

母親に聞いた。

うん？ ああ、おじいちゃんのことかいな。

そうや、誰やったん？

もう時効やし、そんなこと言う人おらへんと思うから……。

母親は言いにくそうに、声を詰まらせながらボクに説明した。

私からみれば、おじいちゃん。あんたの曾おじいちゃんに当たる人は、滋賀県甲賀郡から流れてきた人。コメさんは兵庫県揖保郡の庄屋の娘。コメさんが、大阪に行ったのは、船場に着物を扱う大商人の家に嫁いだから……。結局、お姑さんと馬が合わずその家を飛び

出したけど。行先なく放浪して出会ったのが、おじいちゃんだったと。

説明したあと、さらに母親は言いにくそうに続けた。

本当のことは誰も知らへん。せやけど、一度だけ、お母ちゃんから聞いたことがある。おじいちゃんは、甲賀から流れてきたけど、その前は北海道、アイヌの人やったンや。そのことで、コメさんは、両親から大反対されて籍を入れずに私生児として育てたンや。14人の子供のうち、それを知っているのは、うちのお母ちゃんだけや。

ほう、おもしろいな。

なにが、おもしろいや。その頃のアイヌの人はつらい目には
っかりおうてるンやで。

いや、いや、そうやなくて、オカンの顔みてたら、南方か
北の顔やと、ずっと思ってたから、それが、オモロイ、言うただけ
や。

ボクはその後、北海道であった出来事を母親に話そうとしたが、ヤ
メタ。母親は、これ以上、そのことに触れて欲しくない、といった
表情で居間を忙しい振りをして飛び出して行こうとしたからだ。

あの話と、この話を繋げるのは面白い。ボクのなかで、原点がどこ
なのか、ハッキリと見えた。鬱々として心にわだかまっていた何か
が、消えた。ボクは母親のいなくなった居間で、ひとり思索にまみ
れた。

>そうか、隠さずに優しく紐解いて物語を終えれば良いんだ。

3度目の離婚について、ボクはこのことを切欠にして、答えを出した。自分のこれから先の生き方に繋がる重要な言葉だ。

>これから先、やろうとしている小説家として「書く」ということにも繋がるな。

暗く落ち込んだ気持は、どこにも無くなった。

そこには、これまでの自分を卑下する思いもなく。40年間の自分の生きざまに関わってくれた人たちに感謝することができた。もちろん、過去に結婚した3人の女性にもだ。

そこへと導いたのは、自分は誰なのかというルーツを知ったことだった。

3月中旬。

ボクは実家から再び、富士宮へと戻ると、このファイヤーステーションで原稿用紙430枚にもなる「フラッシュ」をすべて書きなおした。

リミットは2週間。

そうして、出来上がった原稿を締め切り当日のギリギリに集英社へと送った。

後から、読み返すと誤字脱字、つながりのない文章。酷いものだ。よほど、書き直す前の方が良い。それでも、胸にあったものをすべ

て、世に曝け出した自分に安心した。

> 原点に戻った。

そう、感じたからだった。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2697c/>

私小説 「バツ3」

2010年10月12日14時27分発行